

## 二〇〇六年度東北史学会 弘前大学国史研究会五十周年記念

## 合同大会記事

二〇〇六年度東北史学会・弘前大学国史研究会五十周年記念合同大会は、二〇〇六年十月七・八日の両日にわたり、弘前大学創立五〇周年記念会館および同大学総合教育棟において、以下のようなプログラムにより開催された。

### 第一日（十月七日 土曜日）

○公開講演（午後一時三〇分） 於・弘前大学創立五〇周年記念会館  
みちのくホール

「ハプスブルク帝国史への道」

東北大学教授 佐藤 勝則 氏

「在地領主論の現在」

筑波大学教授 山本 隆志 氏

○東北史学会総会（午後四時三〇分） 於・弘前大学創立五〇周年記念会館  
みちのくホール

○弘前大学国史研究会総会（午後四時三〇分） 於・弘前大学創立五

○周年記念会館 会議室

○両学会懇親会（午後六時） 於・ホテルニューキャッスル

### 第二日（十月八日 日曜日）

○研究発表（午前九時三〇分） 於・弘前大学総合教育棟三階

考古学部会

総合教育棟三二八教室

日本古代中世史部会

総合教育棟三二九教室

日本近世近代史部会

総合教育棟三一五教室

東洋史部会

総合教育棟三一四教室

西洋史部会

総合教育棟三一六教室

\*控室



山本 隆志 氏

## 〈考古学部会〉

### 青森県における円筒下層期生業活動の研究

#### ―多雪地域における狩猟活動と生業戦略―

青森県埋蔵文化財調査センター 斎藤 慶吏

東北地方南部以南の縄文時代貝塚から出土する動物遺存体の中で、ニホンジカとイノシシの出土量は個体数で七割以上を占め、これらが縄文時代における動物質食糧として重要なウェイトを占めることが指摘されていた（西本一九九一）。また、人骨の同位体比を用いた食性分析では北海道の前期縄文人にはタンパク質源として大型海産動物の利用が想定されるのに対し、東北地方南部地域ではC3植物を主体とし、必要なタンパク質源を補う形で陸産動物や海産動物の利用が指摘されている（南川二〇〇一他）。本州北端に位置する青森県の狩猟形態は東北地方南部や北海道地域の影響がどの程度及ぶものであるのか、骨角製漁撈具の内容から注意されてきた。三内丸山遺跡第六鉄塔地区では大型哺乳類よりもノウサギやムササビといった中型哺乳類が多く検出されており、東北地方南部、北海道のいずれとも異なる哺乳類組成が明らかとなった。また、東道ノ上（3）遺跡から出土した動物遺存体は中型哺乳類に加え、ニホンジカ、イノシシといった大型哺乳類の検出も多く、県南地域の円筒下層期貝塚と三内丸山遺跡の中間的な様相が確認された。こうしたことをふまえて①動物遺存体組成、②シカ・イノシシ遺存体の年齢構成、③狩猟関連遺構の分布、④骨角器素材選択の傾向を検討したところ、円筒下層期における狩猟内容の地域的な差違に積雪量が影響を与えていたことが示唆された。

### 十和田市明戸遺跡出土の晩期縄文土器

弘前大学大学院 澤田 恭平

現在、弘前大学文学部考古学ゼミナールでは、縄文時代晩期の亀ヶ岡文化研究を課題として取り上げている。その一つとして奥入瀬川流域に所在する明戸遺跡出土の土器について、数年前から実測化を推し進めている。

明戸遺跡は青森県十和田市に所在し、奥入瀬川流域にある舌状台地上に立地した大きな遺跡である。本遺跡は十和田市教育委員会によって一九八二年（昭和五七）・一九八三年（昭和五八）に発掘調査が行われている。刊行された報告書によると、出土した晩期の土器は、いわゆる大洞C1式・大洞C2式に相当する縄文時代晩期中葉を主体とした土器群であると言われている。しかしその多くが未実測の状態であるため、土器の器種・器形、文様の分析をより詳細に行うことを目的として実測図・拓本による資料化を行っている。

土器の器種・器形、文様に着目した結果、全体の約半数が鉢で、深鉢を加えると全体の過半数を占めること、文様が施文されているものは、台付鉢が最も多く、次いで皿・浅鉢となり、有文土器の大半を占めること、施文されている文様は、多くがいわゆる雲形文であることが確認できた。

有文土器を取り上げ、外ヶ浜町今津遺跡出土の晩期の土器と、三沢市野口貝塚より出土した野口コレクションの晩期の土器との比較を行った。その結果、両遺跡とも若干の差異はあるものの、共通性を見出すことができた。

今後の課題として、明戸遺跡の晩期の土器全体の個体数を明らかにし、詳細な報告を行いたいと考えている。

## 晩期縄文土器文様における単位と割付の一樣相

—青森県東津軽郡外ヶ浜町今津遺跡出土資料を中心に—

東北大学大学院 市川 健夫

東北地方の晩期縄文土器には精巧な装飾、文様が施され、その意匠や施文方法には地域的特徴が認められる。当時の社会構造を究明するためには、施文方法等の技術的分析を通じ、地域性や集団相互の関係を検討することが重要である。これまでの施文方法の研究には、藤沼邦彦氏による文様の描き方の分析がある。この研究を踏まえた上で、割付、施文、調整等の技術的観点から、意匠や施文方法に関する客観的な分析方法の確立が必要である。

本報告では、青森県外ヶ浜町今津遺跡出土の晩期四期資料の内、皿や浅鉢三二点について、突起や文様の割付を分析した。割付は器面に対する文様単位の配置を示す。この割付の様相を文様帯の長さや突起との関係から検討した。また、各単位の割付に生じたばらつきを示す指標として「割付角度」を設定し、突起との関係などから角度の違いを検討した。その結果、各文様帯で主に三〜五単位の文様が配置され、単位の大きさを覚えて割付を行ったと指摘できる。突起があるものは奇数、ないものは偶数単位が多い。また、突起と文様の位置もほぼ対応する。「割付角度」は、突起があるものは二〇度前後に収斂し、ないものは四〇度前後のばらつきがあり、突起を目安に割付を行ったと推察できる。こうした分析から、器形や装飾に制約を受けつつも、突起や文様を調整し、均等な割付を意図したことが看取できる。今後、施文方法の研究を深め、他地域の事例の蓄積と比較を試みたい。

## 福島市上条古墳群発掘調査の成果と意義

福島大学 廣谷 和也・菊地 芳朗

上条古墳群は福島市岡部字上条に所在し、前方後円墳一基、円墳四基から構成されたと考えられる古墳時代後期の古墳群である。福島大学は二〇〇四年に測量調査、二〇〇五年、二〇〇六年に一号墳の発掘調査を実施した。他に福島市教育委員会によりこれまで三回調査が行なわれている。

当古墳群では、前方後円墳の一号墳以外は墳丘が残っており、二号墳と五号墳の石室に使用されたと思われる石材がわずかに散在しているのみである。一号墳は、削平により今は二つに分断され、後円部では横穴式石室が一部露出している。

これまでの調査の結果、一号墳は、墳長四六mで後円部に比べて前方部が長大な形と推定される。これにより、当古墳は伊達郡桑折町の錦木塚古墳（墳長四三m）を上回り、福島盆地最大の後期古墳であり、また、東北地方でも白河市下総塚古墳（七二m）に次いで二番目の規模と判明した。また、出土した須恵器や横穴式石室の編年観などから、一号墳の年代は六世紀後葉と推定される。したがって一号墳は、二号墳や五号墳、錦木塚古墳に先行して築造されたと考えられる。

上条古墳群は、信夫評衡と考えられる北五老内遺跡、その付属寺院の腰浜廃寺に最も近い場所に位置し、かつ東北最大級の後期前方後円墳を含むことが明らかになった。当古墳群は、福島盆地の地域間の関係や、信夫評成立期における各勢力の動向など、古墳時代後期から終末期の社会像を読み解く遺跡として注目される。

## 元慶の乱直前の「出羽国内国民三分の一 奥地に逃亡」の考古学的検証

青森県埋蔵文化財調査センター 三浦 圭介

『日本三代実録』元慶三年（八七九）三月二日条に見える「元慶の乱の前に、国守の苛政によつて出羽国の内国民の三分の一が奥地に逃亡した」記事について熊田亮介氏は「九世紀前半の奥羽両国の推定人口は、蝦夷系住民を除いて陸奥国が一六〇一七万人、出羽国が七〇八万人である。数万人台にのぼると推定される多数の公民の逃亡は尋常ではない。

「奥地」は津軽地域を指すとみるのが私見」（熊田亮介：二〇〇四）としている。

熊田氏説が妥当かどうか、津軽地方における七世紀から一二世紀までの調査された全ての古代遺跡について、集落の年代・立地・住居構造を中心に、生業・在地生産の土器（土師器）・祭祀遺物等を加えてその様相を検討した。

その結果、九世紀後半に明らかに集落の急激な増加（約七倍）と、それに伴って新しい住居構造を持つ集落が多数営まれ、また律令祭祀に用いられる遺物も多くなる。このことは既存の集落に、外部から数軒程が新規に加わったものではなく、多数の移住者が集団で、しかも、それぞれ新規の集落を作ったことを意味する。彼らの出自は住居構造や使用される土器類を見る限り、大多数は雄物川流域の住人の可能性が高い。このことは熊田氏による津軽を中心とした地域との妥当性を示すものでも

ある。しかし、津軽が中心であっても一部は米代川流域や太平洋側、更には下北地方においてもその痕跡は認められる。また、津軽における人口の増加は元慶の乱直前のみならず、それ以後、一〇世紀前半まで継続する。

このように九世紀後半から一〇世紀半ばまでの津軽地方は、在地住民をベースにしながらも、南（出羽国）からの多数の移住者によって、状況を呈した社会が成立し、郡制未設置地域とは考えられない内容に変化する。このことは、隣接する陸奥・出羽両国や中央国家とも何らかの形で強く結びついていたことを示唆するものであろう。「逃亡」の理由が史料に見えるような、単なる国守の苛政によるものなのか、また「逃亡」が一般的に理解されている文字通りの「逃亡」なのかは疑問の残るところでもある。広大な津軽平野の本格的な開拓（特に開田）は出羽国にとっても魅力のある事業と考えられ、これには国家が何らかの形で関与していた可能性もある。

## 〈日本古代中世史部会〉

### 阿倍比羅夫の北方遠征と肅慎

東北大学大学院 相澤秀太郎

本報告では、阿倍比羅夫の北方遠征のなかに北方の種族と観念された「肅慎」が登場することの意味を検討することを通して、阿倍比羅夫の北方遠征の目的、及び「肅慎」の政治的意義について論じる。従来、阿倍比羅夫の北方遠征の目的については、北方最辺境のエミシを貢納制的支配のうちに組み込もうとするものであったと理解されており、その意義についてもエミシ支配との関わりから論じられてきた。しかし、右の理解については、以下の点から疑問が当然に生じる。すなわち、七世紀半ばという、東アジア諸国が政治的に緊迫した状況下でありながら、大船団が国家政策として三度にわたって派遣されていることの意味である。さらに、従来の諸説にあつては、エミシ支配の観点から議論されているため、渡島（北海道）まで到達したことの意味や、三度目の遠征の際に比羅夫と対峙した種族を「肅慎」と意味づけていることの政治的意義についての検討が十分ではないと考える。そこで本報告においては、阿倍比羅夫の北方遠征にどうして「肅慎」が登場するのか、といった最も基本的な問題関心から出発し、最終的には阿倍比羅夫の北方遠征の目的を明らかにすることを目指す。それは、阿倍比羅夫が「肅慎」と実際に対峙することは、時間的齟齬により不可能だからである。以下に考察の過程を示しておく。

第一節「肅慎の意義」では、中国古代の北方種族である肅慎について、中国の文献史料の検討を通して、阿倍比羅夫が「肅慎」と対峙することは時間的に不可能であることを指摘し、三度目の遠征に「肅慎」が登場すること自体を問題として設定する。

第二節「阿倍比羅夫の北方遠征と肅慎」では、第一節で得た知見をもとに、阿倍比羅夫の北方遠征に「肅慎」が登場することの意味について検討を通して遠征の目的について論じる。ここでは、従来の解釈の基礎となっていたエミシ支配の一環として解釈するのではなく、七世紀半ばの東アジア諸国の政治的背景を基礎とした、対外関係の視点から阿倍比羅夫の北方遠征の目的、及び政治的意義を捉えることを目指す。

第三節「古代国家と肅慎」では、さきの考察を踏まえて、「肅慎」をめぐる従来の論点を整理し、古代における「肅慎」の存在意義について私見を述べる。

右の考察のように、阿倍比羅夫の北方遠征を対外関係の視点で捉えたとき、そこに込められた古代国家の政治的理念についても東アジア諸国間の政治的背景とあわせて合理的に解釈することが可能となるのである。

## 阿弥陀浄土院造営機構の再検討

東北大学大学院 風間亜紀子

天平宝字四年六月七日に死去した光明皇太后の一周忌齋は、翌年同日に法華寺阿弥陀浄土院にて執り行われた。『続日本紀』天平宝字五年六月庚申条には、阿弥陀浄土院は法華寺西南隅に、周忌齋を設けるために建設されたと記されている。しかし長い間、阿弥陀浄土院は光明子の発願によつて存命中に建設が開始されたと考えられ、従つて『続日本紀』の記述の信憑性は否定されてきた。

このような通説が生じたのは、正倉院文書に天平宝字三年から四年にかけて活動が確認される造金堂所が阿弥陀浄土院の造営機構と推定されたためである。造金堂所＝阿弥陀浄土院造営機構説は長期にわたつて支持されてきたが、造金堂所＝法華寺金堂造営機構とする新説が発表されたことにより、近年では正否を巡る議論が行われている。しかしここで議論は、『続日本紀』など阿弥陀浄土院に直接関わる史料を用いていない点に問題がある。

本報告では、『続日本紀』の阿弥陀浄土院と光明皇太后周忌齋の関連記事を出発点に阿弥陀浄土院造営機構を検討し、周忌齋実行を掌る装束忌日御齋会司の下に設置されたこと、中納言文室浄三を頂点に、実質的な造営においては国中公麻呂を責任者に据え、造仏司官人を主要構成員として組織した機構であったこと、よつて『続日本紀』の記述は支持されるべきであることを論証する。

## 鎌倉殿護持陰陽師に関する基礎的考察

東北大学大学院 永塚 昌仁

鎌倉幕府の陰陽道政策に関する研究は、木村進氏や村山修一氏以来、多くの蓄積がある。とくに、近年では赤澤春彦氏が、『吾妻鏡』所見の関東下向の陰陽師を三つに類型化し、また、その一類型が小侍所御簡衆に配属されるなど、御家人的側面を持っていたことを明らかにした。氏の研究によつて、関東陰陽師制度を通して幕府制度を検討する研究の一方向性が示された。

陰陽師の職掌は、幕府の重要行事における日次勘申や卜占など多々あるが、陰陽道思想をもとにした祈禱が重要である。『吾妻鏡』に頻出する陰陽道祭の記事を見れば一目瞭然だろう。この祈禱師としての機能は、密教僧にも要求されるものであり、「内典・外典」という形でしばしば協力して祈禱が行なわれている。すなわち、祈禱装置としての仏教と陰陽道は密接な関係にあったのである。

密教祈禱の中心的存在が護持僧である。護持僧は、鎌倉殿の身体を日常的に護ることを職掌としているが、彼らと同様な役割を果たした陰陽師も存在した。それを先行研究では護持陰陽師と呼ぶ。しかしながら、この護持陰陽師についての研究は乏しく、具体的な職掌や人員構成についても必ずしも明らかとなっていないわけではない。

そこで本報告では、鎌倉殿に奉仕した護持陰陽師とその制度について基礎的な考察を行い、その上で、護持陰陽師制度の特質を明らかにしていきたい。

## 中世後期加賀国白山麓の村の由緒

仙台大学 永井 隆之

中世後期になると、村の住民が村の既得權益に関わる領域を自ら支配し、その行為を正当化するために、村の由緒を独自に主張し、書き記すようになることが知られる。かかる村の由緒は、中世後期の村の住民が既存の諸思想（当該期の歴史観・信仰に影響された「日本」・「地域」の在り方）をいかに受容し、解釈したかを具体的に我々に示してくれる。

本報告では、加賀国白山麓の禅定道（参拝道）登山口の村々（尾添村と牛首・風嵐村）の白山禅頂社殿造営（白山山頂の社殿を造営した登山口の村が参銭を徴収できた）をめぐる相論に注目し、幕府法廷に証拠として提出された村の由緒書・「泰澄伝」（白山に靈験を感じた泰澄和尚の伝記）の内容を復元することで、村の住民の思想（白山信仰を中心とする信仰）受容の一端を示したい。

かかる問題を検討するために以下の二つの作業を行う。

第一は、尾添村と牛首・風嵐村がそれぞれ属していた禅定道の性格を明らかにすること、そして、第二は、第一の作業の成果をふまえて、尾添村と牛首・風嵐村による禅定道を正当化する主張を、現在のこされた白山縁起や泰澄和尚伝から見出すことである。

## 大浦城跡発掘調査の成果と課題

弘前市教育委員会 三國 良一

津軽の中世を語る上で、大浦城は重要な位置を占めるものであります。今回の発表では、これまでに行われた大浦城跡発掘調査の成果を紹介するとともに、今後の課題についてお話ししたいと思います。

### 一 遺跡の位置と形状

大浦城跡は、旧岩木町の中心街である賀田地区から西方へ約五〇〇m離れた後長根川南岸に広がる台地上に立地しています。標高は約四二mであり、南側の城跡に沿って、岩木山神社に通じる旧百沢街道が通っています。

曲輪の構成は、本丸、二ノ丸、三ノ丸、西ノ丸、西ノ郭、南郭の六つの曲輪で構成されているとみられます。

現在の城跡は、本丸および二ノ丸を中心として大部分が津軽中学校の敷地となっており、周辺には住宅が点在し、そして城跡南部を県道弘前・岳・鯉ヶ沢線が東西に横断しています。

### 二 調査の成果と課題

これまで本遺跡に対して行われた主な調査として、平成七年度の試掘調査と平成八年度の発掘調査があげられます。

文献史料によると、大浦城が大浦光信によって文亀二年（一五〇二）に築城されて以来、城館として機能していたのは、その嫡子盛信、政信、為則を経て、その後為信（初代弘前藩主）が文禄三年（一五九四）に堀

越城へ移転するまでの一六世紀中の九二年間とされています。

一方、平成七・八年度の両調査で出土した遺物は、陶磁器類として中国産の青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿、国産の瀬戸・美濃焼の灰釉皿・鉄釉碗、越前焼の甕・播鉢、唐津焼の碗・皿・甕、瓦質土器の火鉢類、伊万里焼の磁器などのほか、古銭や鉄製品・石製品などがあります。特に陶磁器の年代が一六世紀を中心としたものであったことから、大浦城に触れた文献史料と対応することが明らかになりました。

しかしながら、これまでの発掘調査面積も少ないため、いまだ城館全体の性格を把握できるところまで到達していないのが現状であり、また課題でもあるわけです。

## 〈日本近世近代史部会〉

### 一 八世紀末の近世国家とアイヌ社会の関係秩序

―クナシリ・メナシの戦いの戦後処理を手掛りとして―

弘前大学大学院 市毛 幹幸

近世国家にとって内憂外患の初発的危機の時代とされる一八世紀末の天明五～六年（一七八五～八六）、幕府はロシア南下情報を契機に、蝦夷地へ初の直接的介入を実施した。これにより、ロシアの通商要求を伴う蝦夷地への接触や千島列島における領土拡張と植民地政策の様相など、近世国家北辺の国際情勢が把握された。また、国内的問題として、場所請負制の弊害と松前藩の東蝦夷地「異国境」地域での統治能力の欠如が明らかとなった。

寛政元年（一七八九）、東蝦夷地クナシリ・メナシ地方のアイヌにより惹起された和人襲撃事件は、後者の問題が噴出した結果と理解されるが、松前藩にとり、対ロシア問題と併せて、近世国家における自藩の「浮沈」「興廃」に関わる危機的事件であった。この事件を中心とする一八世紀末の蝦夷地問題に関する研究には重厚な蓄積があるが、松前藩が如何なる政治原則で事件に対処し、当該地域のアイヌ社会との間に如何なる関係秩序を構築しようとしたのかという問題については、同藩が場所請負商人を介してアイヌ収奪の主体となったという従来の結論に収斂されてしまっているように思われる。

本報告では、松前藩の、アイヌ仕置を中心とする戦後処理と幕府への諸報告に示された蝦夷地・アイヌ統治の政治原則を検討して、当該時期における、近世国家権力と「異国境」地域のアイヌ社会との関係秩序の在り方について考察を加えることにする。



## 秋田領鉾山における山林利用に関する一考察

弘前大学大学院 土谷 紘子

近世の鉾山では、山内諸施設や道橋の建設、坑道内の補強、製錬用の炭・薪などに多量の木材を要し、継続的な供給が求められた。特に銅山では製錬工程の差異により、金銀山と比較してより多くの炭薪材が必要であった。

秋田藩では鉾山に必要な木材を伐採するための山林を指定し、藩の許可を得て伐採を行うようにした。このような山林を総称して「掛（懸）山」、「片付山」と称されている。さらに製錬用の炭を伐採する「炭木山」、銅鉱石の焼鉾用の木を伐採する「焼木山」、山内諸施設の建材を伐採する「青木山」と用途を限定した呼称もある。この他、鉾山には水源涵養林の「水の目林」、雪崩や地滑りを防ぐためとみられる「類留林」もあったことが確認できる。掛山は正徳、享保、元文期に多く制定されていることが指摘でき、主な理由として同時期の銅需要の増加、木材移出のための過剰伐採による山林の枯渇があげられる。

秋田藩の林政に関しては研究が蓄積されてきたが、鉾山の山林利用の問題を主体とした研究はなされておらず、林政・林業との関係や周辺村落との入会問題から論じられているのみである。しかし鉾山業・林業はともに秋田藩の主要な産業であり、鉾山における山林利用は同藩の鉾山業、林政や藩財政との関係を考察する上で重要な問題といえる。

本報告では、秋田藩の鉾山における山林利用の実態や山林管理・守護について、藩財政や林業の問題も視野に入れて考察する。

## 幕末北津軽における漁業資本

— 小泊村播磨屋磯野家の事例 —

青森県立郷土館 坂本 寿夫

播磨屋磯野家は江戸後期から明治初期にかけて繁栄した小泊村（現中泊町小泊）<sup>（こどまり）</sup>下前湊の廻船問屋兼場所請負商人であった。小泊村は藩政時代には金木新田組に属する典型的な漁村であったが、湊は大小の船二五艘ほどが出入りでき、漁業の他、若干の交易が可能であった。

磯野家の家伝によると磯野家が小泊村に來たのは八代目の金兵衛で、安永元年（一七七六）に小泊村、後に下前村に居住し、丸木船でカトウサメ漁を始めたところ。同家繁栄の基礎を築いたのは続く九代金兵衛（一八〇五年生—一八六〇年没）であった。彼は長年松前鯉漁の事に努めて村人を鼓舞して盛大に松前に赴かしめ、春漁して夏末に帰村し、自ら山野を開いて牛馬を牧した人物であり、弘前藩の「国日記」にも御用達商人加担として名前が確認される。金兵衛はこれを榮譽として自ら十代六兵衛と改名したが、播磨屋六兵衛は地元では「播金」<sup>（はかせん）</sup>の呼称で広く漁民らに頼りにされた。そしてその富の源は小前の漁民らに蝦夷地各地の鮭場に行く仕込金や米を貸し出し、利子を取り立てることにあつた。

本報告では、この六兵衛の時代に取り交わされた漁民・百姓との借用証文の分析、磯野家の耕地集積の様子、弘前藩の労働力移動制限策の考察などを中心として、蝦夷地に向かって民衆のエネルギーが噴出した状況を見ることとする。

## 明治初期の地域振興策の展開

東北大学大学院 徳竹 剛

本報告は、明治初期の町場商人による地域振興策が、明治一〇年代にどのように展開したのかを検討するものである。

報告で取り上げる福島県安積郡山宿の商人阿部茂兵衛の地域振興策は官庁の「眷顧」（目をかけること、ひいき）を求めるものであった。

これは、戊辰戦争時に打ちこわしを経験したこと、松方デフレ以前であること、町場であることに性格づけられており、明治〇年代という時代性と町場という地域性を帯びた地域振興策であると考えている。こうした明治初期に形成された地域振興策が、明治一〇年代に入り、どのように展開していくのかということが報告の課題である。具体的には郡山宿の地域振興策と福島県の経済的有力者に対する期待とが結合した結果として開始された大槻原開墾事業とその担い手である開成社が、明治一〇年代の政府・府県の殖産興業政策の展開、松方デフレの開始によって、どのような課題に直面し、どのように対応したのかを検討する。

明治一〇年代の展開は、明治一九年の福島県庁移転運動に帰結し、その敗北によって挫折することになる。この挫折に至る過程の検討を通じて、官庁の眷顧の獲得という地域振興策の限界を示すとともに、振興策形成期である明治〇年代の時代性を浮き彫りにする。また郡山宿の担い手である阿部茂兵衛を町場の担い手として把握することにより、明治初期の経済的有力者の活動を検討するにあたって地域性を重視する必要性を提起したい。

## 町村役場に見る学校動員の実態

——青森県東津軽郡旧奥内村役場文書を中心に——

弘前大学国史研究会会員 中園 美穂

一つの町や村に残された行政文書からわかることは何だろうか。その一つは行政末端組織の実態面が把握できることだろう。役場の実態や具体的な活動をみれば、役場に最も近い位置にある町村民の動向をさぐることも可能となる。町村役場文書を活用する意義は、その点にあると思う。

そこで本発表では、教育行政の考察にあたり、国家がどのようにして学校を戦争に動員していったのかを、役場文書を通じて明らかにしたい。青森県の場合、戦災のため戦前までの県庁文書は皆無である。そのため県庁が発給し収受した文書を探るには、町村役場文書に綴られた文書に依拠せざるを得ない。換言すれば町村役場の資料価値は県庁文書を兼ねる分、大きくなる。本発表が町村役場を分析材料として重視するのはそのためである。

役場文書に綴られている教育行政に関する文書を大別すると、①教化動員、②勤労働員、③健民運動、④銃後の徹底の四点にまとめられる。本発表ではこの四点を中心に考察を加えていきたいと思う。その中で教育行政に関する諸通達は、村当局と学校当局へ対等に通達されていることがわかる。これは両者が対等に扱われていたことを示すことを意味しよう。以上の点をふまえながら論をすすめていきたい。